

京都禪と鎌倉禪

荻 須 純 道

一

かつて榮西は「われ歿して五十年、禪宗大いに世に興らん」と豫言したと虎關師鍊は元亨釋書に記している。すなわち京都には東福寺の圓爾辨圓（聖一國師）があり、鎌倉には建長寺の蘭溪道隆（大覺禪師）があつて、教界の舊勢力である顯密諸宗に壓迫され、彈壓されて來た禪宗も、漸くにして武家の心をとらえ、公家の意になつて根をおろし、宋地禪林の規矩が行われるようになった。榮西は臨濟宗黃龍派の禪を傳え、博多の聖福寺、鎌倉の壽福寺や、とくに佛教界の中心地である京都には建仁寺を開創したが、建仁寺は台密禪の兼學道場であり、叡山の別院のような形態において開創されたものであり、壽福寺においても加持祈禱を行つて、密教的性格が強かつた。もともと榮西は傳禪者であると同時に、葉上流の祖とまで崇められる台密の權威者であつた。榮西門下の中でも禪の心印を承けたものには、佛樹明全（建仁二世、入宋して彼地に死す）、退耕行勇（高野山禪定院を金剛三昧院と改稱し、鎌倉淨妙、東勝の二刹開創）、釋圓榮朝（上野世良田長樂寺開創）らである。そしてこれらの禪僧は密教的色彩が強くて、まだ純然たる禪苑の規矩を行ふまでにはいたらなかつた。尤も道元は宋から歸朝後、建仁寺に留錫し、まず普勸坐禪儀を著した。のち深草に庵

居したが、さらに宇治谷口の極樂寺の舊趾に觀音導利院を開き、天福元年（一一三三）伽藍の完備を待つて興聖寶林寺と改名し、禪林の規矩のもとに開堂の式典を擧げた。ここにおいて禪苑の規矩行われ「建仁の本願（榮西）入唐して禪門戒律の儀傳えられしも、只狹牀にして事々しき坐禪の儀はなかりけり。國の風儀に任せて天台眞言などあひならべり、一向の禪院の儀式は時至りて佛法房の上人（道元）深草にて大唐の如く廣牀の坐禪始めて行ず」と無住が雜談集に語る如くであるが、道元が護國正法義を著したとき、遂に叡山の彈壓をうけたことを溪嵐拾葉集は誌している。

後嵯峨法皇御時、極樂寺、佛法坊立ニ宗門ニ毀ニ敎家ニ。覺住坊讀ニ止觀ニ音有レ之。造ニ護國正法義ニ。宗門及ニ奏聞ニ時。故法印御房可レ判ニ是非ニ由被ニ仰下ニケリ。護國正法心ハ乘中緣覺所解也下レ之。不レ依ニ佛敎ニ自開解分スル尤相似リ。然モノモノシク不可レ及ニ沙汰ニ云被レ却ニ彼極樂寺ニ。佛法房追却畢（註）。

このように道元は顯密諸宗の壓力の強い京都から追放されて、北越の地に純一なる洞上の禪を擧揚したが、しかしこれはまだ公認されたものではなかつた。

榮西寂後半世紀にして、禪宗は大いに興起した。すなわち圓爾辨圓は京都に九條家の庇護によつて東福寺を創め、蘭溪道隆は幕府の招請によつて宋から來朝し、鎌倉に建長寺を開き、純然たる禪苑の清規を實踐した。そして兩師ともに祖師榮西の開創した建仁寺に住持した。正嘉二年（一二五八）圓爾は回祿にかかつた建仁寺の諸堂伽藍を復興した。當時圓爾は東福、建仁兩寺を兼管したものか、今日にいたるまで、東福寺常樂庵（開山堂）の塔主は毎夜子刻（午前〇時）を期して獻粥飢經ののち、聖一國師送り鐘を撞いている。その鐘聲殷々として京洛の夜空に鳴り響いている。そしてまた建仁寺開山堂の護國院においては、丑刻（午前二時）に迎え鐘を撞いて獻粥飢經が行われている。圓爾は建仁十世であるが、蘭溪は圓爾について建仁十一世となつた。蘭溪が建仁寺に住持したのは正元元年（一二五九）である。蘭溪は建仁住山中、建仁寺を建寧寺と語録にも記している。後深草天皇の御諱久仁の仁を避けたものであるという。蘭溪

は禪林の規矩によつて入寺開堂し、土地神を安置し、塔頭西來院を創めた。後嵯峨上皇に召されて宮中に入り

夙縁深厚到扶桑^一 忝主精藍十五霜

大國八宗今鼎盛 建禪門廢仰賢主⁽⁸⁾

との一偈をすすめ、帝都に禪門を興そうとしたが、このことは却つて叡山僧徒の反感を買い、蘭溪は京都を去らなければならなかつた。しかし建長五年（一二五三）後深草天皇から「大建長興國禪寺」の勅額を下賜され、かれが身を以て實踐した祖師禪の弘通は遂に禪宗を公認獨立せしめたものである。まことに榮西豫言の如く、圓爾、蘭溪兩師出ずるにおよんで禪の興隆を見た。前者は京都禪を代表し、後者は鎌倉の地にあつて、武家の庇護のもとに祖師禪を擧揚した。かれに引續いて兀庵普寧、無學祖元、大休正念、一山一寧らの來朝僧によつて禪の興隆を見た。これを京都禪に對して鎌倉禪という。

二

さて圓爾辨圓（一二〇二—一二八〇）の京都禪は密教的性格が強かつた。このことは既に日本佛教史の研究⁽⁹⁾（大屋徳城著）において指摘されたことであるが、しかし圓爾は單なる密教僧ではなく、榮西時代より一段と禪の地位を佛教界に高めてゐるし、また宋代禪界に大きな影響を與えた延壽の家風を、日本に再現することが、顯密諸宗に伍して禪を擧揚するためには最も相應しい接化であり、この點圓爾は最適の宗師であつた。虎關師鍊が「建久の間、西公（榮西）は黃龍の一派を導く、只、濫觴たるのみ、建長の中、隆師（蘭溪）は東壖に諷唱す、尙帝郷に薄し。慧日の道は君相に協ひ、化畿疆に洽く、外侮を禦ぎて正宗を立て、教綱を整へて禪綱を提ぐ、蓋し祖道の時を得たものか」と元亨釋書に記しているのも尤もなことである。

圓爾は建仁二年（一一〇二）駿州藥科に生れ、五歳の幼童で久能山に登り覺辯法師に就き、十八歳のとき智證大師の遺跡を慕つて園城寺において薙髮し、また東大寺に行き登壇受戒した。大小乗の佛教學は勿論、孔孟老莊の學も研鑽したが、榮朝の道聲をきき上州長樂寺に行き、その所蘊を扣き、また久能山の見西に見えて密教の秘奧を受け、さらに行勇の住持する壽福寺にも、二十五歳から二十九歳までいたが、東密の系統を引く行勇には餘り心を傾けなかつたもののようで、般若房了心の首楞嚴經を客位に列して聴いたり、鶴岡八幡の法華八講會に列しても己が意に契わず、入宋求法の志を固め専ら大藏經を披閱して、二十九歳の冬、再び榮朝のもとに歸つて師事した。この榮朝は台密を葉上流の榮西に承け繼いだのであるが、蓮華院に住したので、その密法を蓮華流という。そして圓爾は榮朝によつて台密の奧義を究め、三十二歳のときには傳燈大阿闍梨の位に列する權威者となつた。しかしかれは教外の宗旨にいたゞその旨を得ずといひ、涙を流して榮朝のもとを去り、嘉禎元年（一一三五）入宋し、諸方歴參のち徑山の無準師範に就いて參禪辨道し、在宋七年、遂に無準の禪を嗣承し仁治二年（一一四一）に歸朝している。かれの活動した地は九州（太宰府崇福寺、博多承天寺、肥前氷上山萬壽寺）、京都（東福寺、建仁寺）、鎌倉（壽福寺）等であるが、とくに京都の東福寺を中心として禪を擧揚したことはここにいふまでもない。

ところでこの東福寺の寺名は東大、興福兩寺から一字づつ採つて名けられたといわれ、九條道家の宏壯な意圖によつて、總合佛教が計畫されたのであろう。すなわち九條道家が東福寺の建造物並に寺產を處分した惣處分によれば當時者、戀慕釋尊在世之遺跡、欣求如來滅後之值遇、奉願五丈之聖容、建立數箇之堂宇也。是以偏模天竺震旦叢林開堂之風俗、殊定置一食長齋之衲僧、可令受學戒定慧之三門、以大小顯密戒律爲總軌、以眞言止觀宗門爲專宗。是傳教大師素願也。⁽⁵⁾

とあり、戒定慧の三門を受學せしむるために大小乘顯密戒律の佛教を總合し、とくに眞言（台密）、止觀、宗門（禪）を

以て専宗となすのとし、このことは傳敎大師の素願であるとしている。この點榮西の建仁寺開創とその規を一にするものである。いま密敎的なものを惣處分の中に指摘すれば、東西廻廊各二十六間、合して五十六箇間の壁面に禪宗の祖師西天二十八祖、震旦六祖並に眞言八祖、天台六祖等の行狀を圖繪し、禪宗建築にない灌頂堂を設けて胎藏、金剛の兩界曼荼羅や眞言八祖の像を安置し、また寶藏二字の中、一字には密宗章疏並に寶物を納め、他の一字には顯宗章疏並に俗書を入れ、或は寶光院と號する圓堂(八角)一字を設けて丈六の愛染明王像の一體、等身の同像十七體、一寸六分の同像一萬體を安置したという如きである。

ところで圓爾は前述のように入宋前すでに台密の權威者であり、歸朝後徑山無準の禪を舉揚するとともに一方においては密敎經典の講授をしたり、門下に傳法灌頂している。すなわち文永九年(一二七二)十月六日、宰相(基忠)已講の發願によつて、東福寺方丈において大日經を開講し、癡兀大慧(佛通禪師)がこれを筆受し、大日經見聞十卷とした。また瑜祇經見聞があり、同じく癡兀が圓爾に面授したものという⁽⁷⁾。そしてまた弘安三年(一二八〇)十月、遷化する二日前にいたつても普門、惠曉、爾性らの三人に灌頂會を行つてゐる⁽⁸⁾。このように圓爾の禪には密敎的色彩が強かつた。

さてまた圓爾は禪を舉揚するとき、宋の延壽の著わす宗鏡錄を講じたことが聖一國師年譜の中に見うけられる。すなわち寛元三年(一二二四)後嵯峨天皇にこの書をすすめ、天皇は萬機のいとまづねに宗鏡錄を讀まれ、その書の後に筆を染められ「朕得此錄於爾師見性已了」と題せられた。虎關師鍊は元亨釋書に

余昔陪_ニ文應(龜山)上皇、御几上堆_ニ巨編_一、跪而閱_レ之宗鏡錄全篇也。其終有_ニ寛元(後嵯峨)帝寶墨_一曰、朕得_ニ爾師之此錄_一見性已了。宸奎爛然。時余尚幼、以_レ爲_ニ慧日之於_ニ帝者_一也眷眷_ニ矣。逮_レ修_ニ此書_一見_ニ其侍_レ病之事_一、益々欽_ニ叔翰之不_レ謾_一矣。⁽⁹⁾

と誌している。東福寺がまだ竣工しない頃、道家は圓爾を普門院に居住せしめた。寛元四年（一二四六）圓爾はこの普門院で關白近衛兼經の請いによつて宗鏡錄を講じた。このとき眞空、守眞、圓憲、理圓らの顯密諸宗の學僧もその法座に待つて聽聞した。理圓はこのとき百日の間唱導し、世に未曾有の勝集と稱せられた。眞空は字を廻心といい、自ら中觀と號し、三論を學んでその奧義に通じ、また密教を究め法華經を講じて名聲があり、論場敵なく東大寺の碩才と稱せられた。寛元の初め木幡觀音院に住したが、たまたま圓爾が普門院で宗鏡錄を講ずることを聞き、掛錫し參禪して三論の旨を決するところがあつた。そして圓爾もまたかれの三論の學に精しきことを稱揚したという。⁽⁹⁾ また大和竹林寺の良遍は瑜伽唯識の蘊奧を極めた學僧であつた。この良遍もまた圓爾のもとに來て禪要を問ひ、法相宗の極致を論じて眞心要訣三卷を撰述し、書簡を圓爾に呈して跋文を求めた。その書簡の一節に

嘗聞。禪師學綜_二内外_一。解涉_二大小_一。在_レ宋六年。得_二徑山長老之法_一。爲_二臨濟和尚之孫_一。大機大悟。有_二無礙辯_一。但願_二吾宗_一。有_レ言無_レ實。可_レ恥可_レ悲。謹作_二愚鈔（眞心要訣）_一。以呈_二座下_一。願以_二此緣_一。期_二來世_一耳。⁽¹⁰⁾

とあり、良遍は言ありて實なき法相宗を顧みて、圓爾に參禪し唯識教學の極致とするところを撰述し、圓爾と來世を期せんことを念願したのがこの眞心要訣であつた。圓爾はその書に跋文を記した。或はまた元亨釋書によれば天台の座主慈源（道家の子）は顯密の秘奧を問うたり、叡山の靜明が四種三昧を問うている。この靜明は後嵯峨天皇に召されて天台教學を進講したほどの學僧で、栗田口（青蓮院）に居住したとき好學の縉侶大いに集つた。かれが圓爾に「子未だ教觀に精ならず、況んや我が佛祖單傳の正宗、豈に義學の跋⁽¹¹⁾て及ぶ所ならんや」といわれ、圓爾に參禪して凝情頓にやみ、涙を垂れて作禮し「我若し來つて和尚に見えざれば、いかでか無上の妙道を聞くことを得ん。たとひ生を隔つとも敢て師の恩を忘るべからず」といいわつて去り、また弟子公深を圓爾のもとに遣わし教を乞わしめた。⁽¹²⁾ このことを師蠻は本朝高僧傳に、かつて宋の長水子璿が鄒邱慧覺に參禪し提撕されて華嚴教學を復興せしめたこととそ

規を一にするものとし

宋國長水璿法師。問_二瑯琊覺禪師_一曰。清淨本然。云何忽生山河大地。覺勵聲答曰。清淨本然。云何忽生山河大地。璿於言下頓裂_二經綱_一。明公問_二聖一國師絕待妙_一。觸_二其關捩_一。知解際斷。因曰。不_レ見_二和尚_一安得_レ窺_二佛祖玄樞_一。異域異宗。機緣相似。夫法華華嚴圓頓之機設。而從_レ教入禪。振_レ古此二宗而已。魯一變至於道_二之謂歟_一。といつてゐる。思うに趙宋佛教の教禪融合は、延壽以來の傾向であり思潮であつた。まことに圓爾は延壽の家風を日本に再現した禪僧であつた。

次に擧ぐべきことは、圓爾は儒佛道三教の要旨を講述したということである。すなわち聖一國師年譜によれば正嘉元年（一二五七）北條時頼の招請によつて鎌倉へ行き、大明錄を講じ大いに敬信された。この大明錄は宋の居士圭堂の著で宋儒の學說を擧げ、儒佛道三教の類似點を指摘したもので、宋の習合折衷の時代思潮に乗じて試みられた論著である。元亨釋書によれば「或ひとの言く、爾師佛鑑を辭するとき、鑑、大明錄を付して曰く、宗門の大事此の書に備れり、子本土に歸らば是を以て準となせよと。爾携へて歸る。故に平副帥（時類）屢々爾に聞く」と誌し、圓爾が佛鑑すなわち徑山の無準師範のもとを辭するとき、師の無準はこの書を付し、宗門の大事はこの書に備わるから、日本に歸つて禪を擧揚するときこの大明錄を準據とせよと、恰も付法の信の如く重んぜられたものである。しかし元亨釋書の著者虎關師鍊は「爾師の歸る時に將來せる經籍數千卷、見_二今普門の書庫_一にあり、内外の書、棟に充つ。其の中に佛法大明錄二十篇あり、是を以て世人記して言ふのみ。予其の書を見るに謬妄甚だしきこと言ふべからず。故に我通衡の中に其の尤なるものを撿_二つて之を非す_一。凡て數十條なり。又夫れ佛鑑老人は楊岐の中興にして正眼洞明なり。寧ぞ斯言あらんや。只其れ爾師は屢々群書を閱す。其の間或は大明の相似の處を采つて談柄を資くるのみ。後學委_二かにせず_一、輒_二く佛鑑付授の言を加ふ_一」⁽⁹⁴⁾といひ、圭堂の謬妄數十條をかれの著濟北集の通衡に論述したことを述べ、

なお元亨釋書にも二三を擧げて破斥している。

しかし虎闕のいうように大明錄が杜撰不備のものであつたとしても、圓爾はこの書を以て儒佛道三教の相似するところをかりて禪を擧揚し、教化に力めたであらうし、弘安三年（一二八〇）六月書籍の整理をし三教典籍目錄を作つて普門の書庫においたと年譜に誌されているが、のち大道一以の文和二年目錄、知有の明德三年目錄にもこの大明錄が擧げられているならば、圓爾は大明錄を講じ、また儒佛道三教の要旨を述べて禪を提示したのであらう。すなわち文永五年（一二六八）には堀川の大相國源基具に三教の主旨を問われ、三教要略を述べて呈したり、儒教の立場を固執して却つて眞理の宣揚よりも枝末的な儒佛の論争を挑んだ菅原爲長には

菅諫議爲長時爲儒宗、嘗曰唐土三教、更相陟降、本朝儒學、不及釋氏、何哉、意每銜之、聞師道化、其一戰以決雌雄、一日偶會莊嚴藏院、師曰我法佛佛授手、祖祖相傳、苟無師授、則爲虛設、某甲世尊以降五十五世、强弩窮矢、雖亦不穿魯縞、而猶以三系授、稱釋氏、以釋例儒、亦當如此、不知公於孔子已得幾世、平、菅公鉛口而退、語人曰、我欲與爾師抗衡、彼詰以三世系、我已不能酬對。

といつたような禪の作略を用いたが、晩年においても建治元年（一二七五）には龜山法皇に三教の旨趣を進講した。これを思うに徑山の師無準師範が「三教聖人、同一舌頭、各、門戸を開く、其の旨歸を鞠せば、則ち二致なし。惟禪宗は語言情識の表に超出す。之を無門の門と謂う」と喝破した無準の家風を承け繼いだものといわねばならない。

さてこのように聖一禪の性格を考察するとき、圓爾は入宋前密を究め、そして入宋して徑山無準から祖師禪を嗣法して歸朝しているので、京都に東福寺を開創したときは、密教的性格を多分に持った形態において法幢を樹立した。當時南都北嶺の顯密諸宗は斷えず、新興佛教に彈壓を加え、宗論を申込んだり、新興する佛教の停止を朝廷に敷訴した。正統佛教を以て任ずる顯密諸宗は、新興佛教を全く相反する邪教として排斥し相容れなかつた。このような佛教

界の事情のもとにあつて、圓爾は顯密の教宗と新興佛教の禪とを調和し、止揚して當時の佛教界に清新な氣風を入れて、法幢を樹立したとみることが出来る。しかも教禪並置することは、圓爾には矛盾しなかつたであらう。當時宋代佛教の動向は、教禪一致、淨禪一致、儒禪一致、儒佛道三教の一致といった習合折衷の思潮の上に打立てられた佛教であり、圓爾の師無準は南宋掉尾の禪傑で、この時代思潮の上に法幢を高くかけた禪僧である。圓爾が宗鏡錄を講じ、大明錄を依用して三教の旨趣を述べたのも、宋代佛教の動向に影響され、また自らも酌むところがあつたであらうが、しかしその歸結するところは禪であり「禪とは佛心なり、律とは外相なり、教は言說なり、稱名は方便なり、これ等の三昧みな佛心より出たり、故に此宗を根本とするなり」と示す法語によつて明らかである。宮廷や九條家一門の歸仰を得て確立した圓爾の公家禪は、宋代の禪風を再現しつつ、また宋の禪者とも異なる密教的性格をもつ獨自性があつたが、榮西より更に一段と佛教界における禪の地位を高めている。溪嵐拾葉集に

近頃入唐僧共習禪宗、輩用淨房聖人後號僧正^(第上)。此人於唐土習禪法、歸朝後弘通之。眞言吾朝於自^(第上)本習學アリキ。於唐土雖^(第上)碩望之。唐土眞言教廢人師無之。仍用淨房於唐土眞言師セラレタリ。當世ナントハサコソ廢タラメ。此人弟子般若房法印云人有之。其隨分眞言師也。用上房御意。禪宗天台眞言下可置之由思召給。是山法師也。云々。

というように、叡山側の文獻によると、葉上房すなわち榮西は、禪宗の佛教界における地位は天台の上で、眞言の下に置いていたと見ている。勿論叡山僧は禪宗は天台に及ばないものとし、泉涌寺俊芳の例をとり、

又我禪法師云人有之。是於我朝學天台入唐於唐土隨公請論決授人也。此人爲禪宗。然者禪宗天台不及存間。於吾朝不弘通。泉涌寺最初建立人也。云々。

と誌している。しかし圓爾の禪宗に對して

聖一房東福寺長老也。元寺法師也。此人習禪宗、意據日本國天台眞言等行人本山多之。故人目不可立。日本國禪宗弘通人盛無之。仍習禪宗弘通、思習之云云。其時眞言宗如法法タリキ。花嚴宗猶盛隨分習タレドモ花嚴宗不弘通。聖一房存知禪宗天台眞言等其上置之思也。常禪宗輩此定申也。

といい、圓爾は禪宗を天台、眞言の上に置いてゐることを誌している。漸くにして禪が勃興し、禪侶が禪宗の地位を高めつつあることを肯定している。圓爾が禪の地位を天台、眞言の上に置くということ

天台眞言上置禪宗云事。聖一房不限、一切教、教家下之禪教外別號之。禪過宗無之慢也。天台等教家皆六塵修行云下之。皆皆昧落也。

と批判し、聖一房に限らず、禪徒は一切教を教家と下し、自らは教外別傳と號して、禪に過ぎたる宗旨はないと慢じてゐるとしてゐる。もともと叡山は禪を該攝してゐるものとして來た。安然是教時諍論に「禪門はただ大乘の理觀を傳え、天台はただ顯教の定慧を行じ、眞言はただ秘密の事理を修す。この三法を備えるはただ我一山なり。印度斯那未だこの盛なるものを聞かず」と説いたとなし、叡山で遮那、止觀の兩宗が行われて、禪が弘通しないのは、天台宗十六門中の圓教空門に禪門を攝してゐるからであるとした。

さてこのことを、さきに述べた東福寺開創の惣處分に「戒定慧の三門を受學せしめ、大小顯密戒律を以て總躰となし、眞言、止觀、宗門を以て專宗となさしむ。是れ傳教大師の素願なり」としたことと思ひ合せて考へるとき、その形態、趣旨においては叡山佛教の再興であるが、ここにいる宗門(禪)は達摩の祖師禪であり、天台の止觀等の如來禪とは異つてゐる。圓爾の禪は祖師禪であるが、佛教思想史の展開の上から、その形態においては台密の密教的性格をもつており、ここに圓爾の代表する京都禪の特徴がある。

さきに述べたように、榮西寂後半世紀にして、鎌倉には中國から蘭溪道隆が來朝し、つづいて兀庵普寧、無學祖元、大休正念、西礪子曇らの宋僧や元僧一山一寧をはじめ數多くの中國僧が來朝し、祖師禪を提示して武家を接化し、新たな禪風を擧揚した。これを圓爾の京都禪に對して鎌倉禪という。

來朝僧が禪を擧揚しようとしても、まず第一に言語が通じない。そして多くの武士は無學である。このような武士を提擧接化するために、教乘禪、即今禪、機緣禪等が行われた。いうまでもなく、最初鎌倉に禪を傳道したのは榮西である。かれは台徒の反對を受けて鎌倉に來錫し、正治二年（一二〇〇）政子の本願により壽福寺を開創した。このとき以來、鎌倉に教乘禪が行われた。教乘禪とは經説を拈じ來つて禪へ導くものである。これは主として榮西門下やその門流において行われた。即今禪とは蘭溪や祖元らの中國僧は日本語に慣れなかつたから、僧俗接化に當つて難解な祖錄、禪語を避け、即今その場で人々の機緣に應じた公案を設けて化導したのでこの名があり、機緣禪とは僧俗の熟知する諸種の禪機因縁を公案とし、また無學の武士には卑近な機緣から商量して、漸次圓熟するにしたがつて、祖錄公案を用いて針錘したという。續禪宗編年史は湘南錄なるものを依用し「大覺單衣ひとえあり、嘗て貞永式目を執筆せし法橋圓全の説に、示篇を衣篇と誤認し、禪は單衣なりとせり。大覺曰く、東府鎌倉の民、禪を以て單衣の義となすも可なりと哄笑しつつ、禪は元來重着なし、一單一枚平等なり、之を打成一片——法外に我なく我法一體なりと云へり」とし、また「佛光の禪禪あり、曰く北條泰時の重臣玄蕃允康連の部下に盛勝なるものあり。禪宗の禪を禪の義と解せし時、一眞侍者（佛光錄の編者）便ち禪子こんすを盛勝の面前に提起し、一切衆生這の禪子中に蠢動す、禪底打破の時作麼生と、盛勝無語」の機縁を誌し、これらが公案として用いられたのは古先印元の頃からであつたという。

このように鎌倉禪は言語の十分通じない中國僧が公家に比較して教養の低い武士を對象として、接化提撕することによつて形成されたものであり、しかも幕府が京都の公家文化に對立して武家文化を興起せしめようとしたときで、幕府は宋から名徳を招請し、また宋の滅亡後は數多くの中國僧が來朝したが、これらの來朝僧は從來の佛教界を顧慮することなく、純然たる宋地の禪林清規に基いて禪風を擧揚した。この點圓爾らの京都とは趣きを異にする。もつとも榮西やその門下が、鎌倉において禪を擧揚するときには密教的色彩があつたとしても、蘭溪道隆が建長寺を開創したり、無學祖元が圓覺寺を創建したときには、純然たる禪林の規式に従つたものである。蘭溪道隆や無學祖元は來朝した禪僧の代表的人物であるが、のち法孫の榮えたのは無學祖元の系統すなわち佛光派であるから、いまここにおいては無學祖元（佛光禪師）の家風について考察する。

かれは諱を祖元といい、字は子元、無學と號し、俗姓は許氏、明州慶元府（浙江省）の人で、南宋理宗の寶慶二年（一二三六）に生れた。十三歳のとき父を亡い、臨安の淨慈寺に投じて出家し、北磻居簡について落髮受具し、翌年徑山の無準師範に見えて參禪修道した。十七歳のとき狗子無佛性の公案を授けられ、門を出でざること五年であつた。一夜四更、首座寮の板聲をきき忽然として發明するところがあり、

一槌^ス擊碎^ス精靈窟　突出^ス那吒鐵面皮
兩耳^ス如^ス響口^ス如^ス啞　等閑^ス觸著^ス火星飛

との一偈を呈したところ、無準は少しくこれを可とし、さらに香嚴擊竹の頌を示した。無準が示寂したのは、石溪心月、偃溪廣聞、虛堂智愚、大觀乾初らの諸老に參じた。たまたま大觀物初の大慈寺で、一日井樓に登つて水を汲み、轆轤の牽動するとき省悟し、さきに無準の示した狗子無佛性の話、香嚴擊竹の頌ここに餘蘊なく、はじめて先師無準の妙手の深密なることを識得した。ときに年三十六歳であつた。咸淳五年（一二六九）台州（浙江省）の眞如寺に住

し、おること七年、學徒大いに集つたが、徳祐元年（一二七五）秋、元兵の侵入により温州雁蕩山の能忍寺に避難した。しかし翌年元兵は温州にも押入つて來たので、衆僧はみな逃げ去つたが、かれは獨り堂中に兀座して去らなかつた。元兵はかれの頸に白刃を加えようとしたが、神色動ぜず一偈を拈じて「乾坤孤節を卓つるに地なし、喜得す人空法亦空なることを、珍重す大元三尺の劍、電光影裏に春風を斬る」と。群虜は感悔し作禮して去つたという。このことは人のよく知る話柄である。かれは南宋衰滅のときに出世したが、北條時宗に招請されて日本に來朝した。日本に來朝した弘安二年（一二七九）は南宋の亡びた祥興二年に當る。この年の秋、建長寺に入り、時宗は弟子の禮をとり、歸依いよいよ厚きものがあつた。かれは時宗に莫煩惱の三字を與えて心膽を鍊成し、元寇の大難に備えしめた。元寇靜まつてのち弘安五年（一二八二）圓覺寺を開創したが、同七年時宗俄かに卒したので圓覺寺を退き、建長寺に歸り、同九年（一二八六）九月三日、「來るも亦前まず、去るも亦後れず、百億の毛頭師子現じ、百億の毛頭師子吼ゆ」と遺偈を書いて示寂した。壽六十一。なお現在圓覺寺正續院舍利殿裏の佛光塔は、のち建武二年（一二三五）に移されたものである。

さてこの鎌倉禪の代表ともいふべき、無學祖元の演法した佛光國師語錄の中には、圓覺經や楞嚴經が依用されているところが隨處に見られる。さきに述べたように、鎌倉禪を形成した中國僧は言語が不自由であつたから、學人接化の手段としては、當機觀面に學人を鉗錮し悟入せしめたであろうが、演法された法語は佛光錄の場合、とくに圓覺、楞嚴等の經典が教學的基盤をなしているように思われる。いうまでもなく圓覺經は詳しくは大方廣圓覺修多羅了義經といい、この經典の流布に勤めたのは唐の圭峰宗密である。宗密は荷澤神會の系統に屬する禪僧であるが、また清涼の澄觀に就いて華嚴を學び、禪源諸詮集都序を著して教禪一致を主張し、華禪融合の一隻眼を以て圓覺經を註釋し、圓覺經大疏十二卷、圓覺經大疏鈔二十六卷、圓覺經略疏四卷、圓覺經略疏鈔十二卷、圓覺經略疏科一卷、道場修證儀

十八卷等の撰述をなし、またその講布に力めたので、ここに華禪融合の潮流が端を發した。のち宋代にいたつて、華嚴の學僧長水の子璿は楞嚴經義疏十卷を撰述した。かれはかつて洪敏について楞嚴經を學び、また瑯琊の慧覺に參禪して提撕をうけ、華嚴を究めて華嚴教學を復興せしめた。楞嚴經は詳しくは大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經という。子璿は楞嚴經を隨文解釋して、その根本思想である如來藏緣起を明らかにし、華嚴の玄旨に誘導しようとした。また宋代の禪僧の中には、圓覺、楞嚴等の經典を依用して說禪するものも多く、華禪融合の潮流は大きく流れた。いま無學祖元の演法した佛光錄に圓覺經、楞嚴經等が依用され、教學的基盤をなしていることは、宋代禪界動向の投影であり、その思想的性格においては、華嚴的性格を持つていたように思われる。

弘安五年（二二八二）十二月八日、祖元は圓覺寺を開創し開祖となつたが、開堂の日に白鹿群り來たので山號を瑞鹿山とし、またこの地中から圓覺の二字ある石櫃を發掘したので寺名を圓覺寺と稱したと傳える。そして大光明殿（佛殿）の本尊として寶冠の釋迦佛、脇侍に圓覺會上の十二菩薩を祀つた。開堂の日の法語に

會す麼。無上法王に大陀羅尼門有り、名けて圓覺と爲す。一切清淨眞如菩提涅槃流出す。過去の諸如來、斯の門已に成就し、現在の諸菩薩今各圓明に入る。未來修學の人、當に依つて此の如く住すべし。恁麼に見得せば、便ち見ん。無方清淨、無邊虛空、一身清淨。一身清淨なるが故に多身清淨、多身清淨なるが故に、乃至十方の衆生清淨ならずといふこと無し。虛空を盡して一切平等清淨。^(四)（原漢文）

といった一節がまず趺坐し拄杖を拈じ、大衆に向つて演法された。圓覺とは圓滿なる覺性の意であり、「無上法王に大陀羅尼門あり、名けて圓覺と爲す。一切清淨眞如菩提涅槃及波羅密を流出す」といえるものこれである。これは圓覺經の文殊章に示された圓覺の體用を説かれたものである。また「無方清淨、無邊虛空」以下の語は同經普眼章に見出される。このように圓覺經を依用して、さらに禪的な拈弄がなされている。

また佛光錄（卷三）に越州太守の夫人が釋迦の像、楞嚴經を慶讃するため、陸座說法を請うた。そこで祖元は楞嚴經を依用して說法し、大唐の儒家に佛を信じ得ないものがあつて、十二部經を渺茫として際限なく統緒がないと非難したが、秀才家も諸經を看ること恰も樵夫が大海に入つて心目くらみ、東西南北の方向も分らないようなものである。千の中九百九はこの類で、謗りをおこす。しかしただこの楞嚴經を看るものはみな信向することを知るのである。まさに如來の徹のあるところを知り、この經を見ることが晩おそかつたことを恨むものもあるとなし「此の經は破相顯理、指意尅的、一句兩句、白石蜜の中邊皆甜あまきが如く、雪山の草寸寸是れ藥なるが如し。奇なる哉不可思議なり」と讃歎している。そして宋の儒家に方秋崖なるものがあり、かれは排佛論を主張する儒家に對して書を作つていふには

楞嚴圓覺の兩書は、佛の兵將なり、佛の士馬なり。佛の城郭なり。若し彼を破らんと欲せば、須らく當に堅甲利兵なるべし。亦當に彼の圓覺楞嚴二書の如くなるべし。方に之れと立敵すべし。若し此れ無くんば輕しく釋教を議すべからず。吁此の經は、帝釋誓中の珠の如く、能く一切の衆毒を消し、能く一切の魔事を降す。（原漢文）

といつたと前置きして禪が演法されている。祖元は時宗をはじめ鎌倉武士に寫經の功德をすすめたものか、しばしば寫經に因んで說法している。そしてその書寫された經典は楞嚴、圓覺、金剛等の經典である。まだ建長寺住山の頃、時宗は祖元に就いて修道し、元寇のときは血を出して寫經した。「日本國主帥、平朝臣、深心般若を學ぶ。爲に億兆の民を保んず。外魔よま四に來り侵す。國を擧げて怖畏を生ず。朝臣勇猛を發し、血を出して大經を書す。金剛と圓覺と及び諸の般若、精誠所感の處、滴血滄海と化す。滄海渺として無際、皆是れ佛功德、重々の香水海、照見す浮幢刹、諸佛寶蓮に坐す。常に如是經と説き、一句と一偈と、一字と一畫と、悉く化して神兵と爲る。猶は天帝釋と彼の修羅と戰ふが如し。此の般若の力を念じて皆勝捷を得たり。今此の日本國亦佛の加被を願ふ。云云（四）」と熱烈高邁にしては

げしき家風を窺うことが出来る。しかしこの佛光錄には圓覺、楞嚴等の經典が依用され、さきに述べるように、宗密や子璿の華禪融合の影響があり、したがってその禪の普說演法に當つては華嚴の性格をもつていた。

四

上來述べるように圓爾辨圓の聖一禪の性格は密教的であり、無學祖元の佛光派の禪の性格は華嚴的であつた。ともに中世における日本の有力なる臨濟禪の流派として榮えた。そして圓爾も祖元ともに徑山の無準師範の門下であり、その家風をうけついで嗣法者である。圓爾の禪が密教的であつたのは、圓爾が台密の權威者であり、また佛教界の中心であつた叡山佛教が台密であるから、したがって京都において法幢を樹立した圓爾は禪風舉揚の形態においては密教的性格が強かつた。祖元の禪が密教的色彩がなく、華嚴の性格をもつていたのは、趙宋佛教がすでに密教は衰微して唐代のように隆盛でなく、宋初延壽が試みた教禪一致の習合思想も、華嚴、天台、法華等の性相の顯教と禪との融合を主として強調したもので、唐の宗密が試みた華禪融合の潮流は宋代において再び大きくとりあげられ、子璿らによつて主張されたものである。したがつてこのような佛教界の動向の中に修禪し大成した祖元は華嚴の性格をもつていたつたであらう。そしてまた習合折衷の時代思潮の上に禪を舉揚したのが無準であるから、その家風をうけつぐ圓爾、祖元は同門でも、事情の異なる京都・鎌倉の地において法幢を樹立し、各々独自の禪を形成したと思われる。なお無準は覺如居士周琪の撰した圓覺經夾頌集講義に跋文を記している。この書に跋文を誌している禪僧は無準の他に癡絕道冲、石溪心月、偃溪廣聞らがあるが、石溪や偃溪は先師無準の寂後、祖元が夢じた禪者である。

註(1) 雜談集卷八。

(2) 溪嵐拾葉集卷(大正藏第七十六卷讀書宗部七)。

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
圓覺經夾頌集講義	同上。	佛光國師語錄卷三。	佛光國師語錄卷四。	續禪宗編年史參照。	同上。	同上。	同上。	溪嵐拾葉集卷九（大正藏第七十六卷續諸宗部七ノ三）。	聖一國師假名法話。	無準師範禪師語錄卷六（續藏第二篇第二十四套第五冊）。	聖一國師年譜文永五年の條。	禪宗編年史。	元亨釋書卷七。	元亨釋書卷七。	本朝高僧傳卷十五。	聖一國師年譜文永八年の條。	元亨釋書卷七。	同上。	本朝高僧傳卷六十。	元亨釋書卷七。	聖一國師年譜弘安三年の條。	禪宗編年史。	東福寺誌所收。	東福寺誌。	元亨釋書卷七。	延寶傳燈錄卷三。